

シュンペーターと政治の関係は、従来、『資本主義・社会主義・民主主義』<sup>1</sup>における民主主義論によって語られてきた。その代表的な解釈は次のようなエリート論である<sup>2</sup>。すなわち、古典派的な民主主義論においては各個人の自己決定が中心概念であった。そして、すべての問題についてすべての個人が決定に参加するのは非効率的だという理由から、やむをえないものとして代表制を要請していた。しかし選挙権が大衆にまで拡大すると、大衆はそもそも政治問題に対する合理的判断能力を欠いた存在であるため、古典派的説明が実態と乖離したものになった。大衆の高度な政治参加が全体主義を生んだというのが、その象徴的な出来事だった。そこでシュンペーターは、代表制を中心概念とした現代的で現実的な民主主義論を提示した。それは、政治的決定における選挙民の役割を代表の選択に限定し、そのかわりに代表候補者（政治的企業家）たちに票の獲得をめぐる競争をさせ、その競争の中で選挙民のためになる政策を提示させるというものである。これによって「人民による政治」を維持しつつ「人民のための政治」も確保することができた。

以上のような解釈は、シュンペーターは本来的に経済学者であって、晩年になって自らの企業家中心の経済観を政治の領域にも適用し、その結果として新たな民主主義論が生まれたのだ、という理解と結びついている。これはシュンペーターの思想体系において、政治をその外縁部に位置づけるものだといえる。しかし実際にはシュンペーターは、その活動の初期から政治に関する発言を行っており、それは彼の思想体系の中で中心的な位置を占めていたのである。本報告の目的はこれを示すことにある。

まず社会階級論を検討しよう<sup>3</sup>。シュンペーターは、社会の実体を多様な社会階級の寄せ集めとして把握していた。各社会階級はそれぞれ独自の機能を果たしている。その機能は、社会的に必要なものとして社会から要請されるものである。その機能を核として各社会階級はそれぞれ特有の利害や物の見方や文化を形成している。各社会階級の内部には多数の家族が存在する。各家族は自らの属する社会階級に与えられた機能を上首尾に果たすことによって、その階級内部での自らの地位を上昇させることができる。また自らが属するのは異なる社会階級の機能を果たすならば、別の階級に移動することになる。

このような階級内での、あるいは階級間の壁を越えた移動にかかわる能力をシュンペーターは適性（特性）と呼び、その特徴を次のように説明している<sup>4</sup>。すべての適性は、平均的な値の人間が最も多く、平均以上または平均以下になるに従って人数が減少していくという形で分布している。この時、最高度の適性を持つ人間に対してのみ、彼を特徴づける標識としてその適性を用いることができる（たとえば誰でも歌を歌うことはできるが、他方で歌唱力は少数者のみしか持たない適性であると言うことも、そうした意味においては正しい）。

この図式は、シュンペーターにおける社会と個人の関係を示している。シュンペーターは、「人は頭脳を持っているがゆえに自分の選択で行動できる」というベルンシュタインの言葉をひき、こうした発想は単純かつまったくの誤りであって、実際には、人は自分の活動の方向を選ぶ時に、その活動の基礎となる彼の立場や見方や性向が客観的な与件によって型にはめられているのである、と述べている<sup>5</sup>。つまり、本人は自律的に選択しているつもりでも、実際には社会環境によって一定の型の中に枠づけられており、こうした形で社会環境が個人の行動を規制しているというのである。

型の中での選択ということによってシュンペーターが意味しているのは、人間がどのような機能を果たすべきかについては社会から与えられるのであって、人間が意識的に決定できるものではないが、それをいかに上首尾に行うかについては個人の適性によっているのだということである。たとえばシュンペーターは、資本家の持つ剰余価値がそのまま増加していくというマルクスの見解に対し、次のように反論する。すなわち、社会の論理が個人に対して利潤の投資を強制するという限りでは、個人の動機は独立性のない通過点にすぎない。しかし個人がどれだけをどのような仕方ですべて投資するのかについては、社会の論理は一義的な決定を下さないものであって、それは個人的な計算に基づくものである<sup>6</sup>。

そして、リーダーシップ（指導力）という概念も、シュンペーターが以上のような適性の一つとして捉えていたことに注意せねばならない<sup>7</sup>。指導者は大衆とかけ離れた存在なのではない。リーダーシップという適性は、それを多く持つ者から少なく持つ者まで連続的に分布しているのであり、指導者というのはその適性を最高度に持つ者を表す言葉ではない。また指導者も、社会環境によって一定の型の中に枠づけられているのである。

シュンペーターの指導者論は、「グスタフ・シュモラーと今日の諸課題」<sup>8</sup>の中で、シュモラーの今日的意義を探るという形式をとりながら述べられている。この論文は、シュモラーが科学者でありながら同時に自国民に政治的目標を設定したことが科学の濫用に当たるかどうかと問うたものである。この中でシュンペーターは、科学は存在のみにかかわるのであって当為に立入ることはできないという立場を表明してケインズやピグーを批判する一方で、シュモラーについては「国家の観点」に立つことによって国家的目標を科学的に示すことができたのだと擁護する。擁護の理由は二つである。一つは、社会諸集団間の対立は「利害の共通性と共存しており、敵対的な利害の社会的に必要な機能が存在するという意識と一致しうるような対立」であるため、「いかなる利害集団にとっても他の集団の利害がどうしてもよいものではありえない」からである<sup>9</sup>。この説明はシュンペーターの社会階級論から容易に理解しうる。シュンペーターにとって、公益や共感の存在を前提とする古典派は、ブルジョア階級しか見ず、多様な社会階級が独自の文化を持って対峙していることを認識しない点で誤りであった。他方で社会階級間の対立を過度に強調するマルクス主義も、各階級が社会的に必要な機能を持っているがゆえに妥協せざるをえないことを見逃した点で誤りだった<sup>10</sup>。シュンペーターは、社会諸集団が敵対的な利害や理想を持っ

て対立していることを前提としつつ、しかしそれぞれが社会的に必要な機能を持つ以上、特定の集団の立場を貫徹させることはできないのであって、社会諸集団の必要性を顧慮するような政策をとらねばならないと、考えているのである。もう一つは、「直接に講ぜられるべき方策は、おのおのの瞬間の必然性によって決定されている」ために、「個人としての責任ある政治家も、また責任ある集団や政党も、彼らに任意の多くの方途間での選択を許さず、彼らの信条が示す方途の無頓着な採用の可能性も与えないもろもろの所与・必然性・責任からなる一つのシステムの中へと自分が直ちに拘束されていることに気づく」はずであり、それを忘れては失敗や敗北につながるということである<sup>11</sup>。この点は、政治指導者が自由に好きな方向へ指導するのではなくて、実際には必然性に束縛されているということを表す。別の箇所でも<sup>12</sup>シュンペーターは、リーダーシップという言葉で精神的な創造者や天才といった個人や集団が自由意志に基づいて可能性の王国を創造するということを意味するものではないと述べている。

必然性の問題をもう少し掘り下げよう。シュンペーターは社会発展という観念を持っていた。それは第一に、「歴史的状態が不断に変化するという事実であって、歴史的状態はまさにこれによって歴史的時間において歴史的個体になる」ということを意味し、第二に、「あらゆる歴史的状態はそれに先行する状態から適切に理解しうること、従って個々の場合についてこれが満足になされていない時には、われわれはそこには解決不能な問題が存在するのでなく、未解決の問題が存在すると見なすということ」を意味する<sup>13</sup>。すなわち、シュンペーターにとって社会は変化するものであるが、その変化の内容は直前の状態から必然的に決まるのであって、いかなる人間でも社会の変化を自由に創造することはできないのである。リーダーシップとは、社会の必然的变化を理解し、自らと慣習的行動を継続しようとする人々を、それに対応させることなのである。

要約すれば、シュンペーターの政治指導者は、自由に国民を指導できるのではない。第一に国家的・全体的な政策を、第二に社会の必然的变化に対応するような政策を、実行しなければならないのである。

このような指導者像はシュンペーターの文章に一貫して登場する。たとえば『資本主義・社会主義・民主主義』の中で革命後のフランスについて、当時の差し迫った政治的必要は宗教的合意であったと指摘し、反教會的感情、カトリック的感情、自分達の司祭や教會を望む農民感情、等々のにらみ合いの中で、いくつかの妙手によってこの問題に合理的解決をなしたのがナポレオンの功績であったと述べている<sup>14</sup>。また 1914 年にシュンペーターはベーム・バヴェルクについて偉大な政治家だったと賞賛したが、それは、国家にとって必要だが、実現しても誰にも感謝されないという最も困難な超人的仕事である健全財政政策を、自己抑制・集中力・義務感によって成し遂げたことに向けられていた<sup>15</sup>。

これは、「メモランダム I」<sup>16</sup>や『租税国家の危機』<sup>17</sup>の構成自体にも表れている。そのどちらでも、シュンペーターはまず前段で、政治的な実行可能性の問題を一旦まったく排除した形で、オーストリアがいかなる政策をとらねばならないかを検討し、それぞれド

イツとの関税同盟の拒否や財産税の実施という結論を導く。そして後段においてその実現可能性を問うという形で、政治問題を扱う。そこで、オーストリア政治の問題点を、そもそも何らかの政策を実行する能力がないという点に求め、実行力ある政府が存在するならば、前段で提示した政策を必ず行うであろうが、実際にはそれは困難だと結論づけるのである。

このようにシュンペーターの政治論では、行うべき政策はシュンペーター自身が「国家の観点」に基づいて必然性を理解した政策なのであって、政府はただ万難を排して実行することだけが求められるのである。結局シュンペーターの政治論は、いかに実行力ある政府を作りうるかという問題に収束するのである。このような政治観の背景に、ハプスブルク帝国で伝統的に政治を担ってきた中立的国家官僚のエートスがあったということは大いに想像しうる<sup>18</sup>。シュンペーターの指導者像に対する今後の研究は、ニーチェやゾンバルトといった思想家と比較するよりも、彼自身の概念をより深く掘り下げ、当時のオーストリアの文脈に即して理解するという方向性が求められよう。

ところで、シュンペーターは『経済発展の理論』の中で、企業家を指導者の一類型として扱っている。実際、新結合を行うには「確固たる事物をつかみ、その真相を見る意志と力」や「ひとりで衆に先んじて進み、不確定なことや抵抗のあることを反対理由と感じない能力」<sup>19</sup>が必要だと述べているが、これは上で見た国家の指導者に要求される能力、すなわち必然的な社会発展を理解することと、それを断行することに重なり合う。シュンペーターが企業家について説明している箇所では挙げて例も、火災中の船から乗客を救出するとか、あるいは「ルイ 16 世治下のフランスの社会的、政治的全状態を、『節儉』によってあるいは後には立憲主義の確立によって、根本的に改善する」ことであり<sup>20</sup>、上の指導者のイメージに重なり合う。たとえば火災中の船において、指導すべき方向は乗客の救出であるが、それは事物の論理から明らかなのであって、指導者が自由に選択できるものではない。この時、慣行の行動を取り続けようとする人々を必然的な方向へと動かすのが、指導の役割だということである。シュンペーターの企業家は、よく知られているように、発明家と切り離されている。常識的な企業家のイメージでは、発明家と企業家が重なり合うので、彼がなぜこの二つをわざわざ区別したのかはこれまで十分に説明されてこなかった。しかしこれは、事物の必然的な発展に応ずるような決定をせねばならないという政治的指導者のイメージが背景にあったことを示しているのではなかろうか。

シュンペーターは社会階級の序列について、どの社会階級も必要な機能を担っており、その限りでは階級間の相対的な階層秩序を決められないが、しかし他方で社会諸集団を指導する機能を担う階級が上層に来ると述べている<sup>21</sup>。また、指導という機能は純粋な状態で表れることはほとんどなく、常に、それに特色や方向性を与えるような他の何らかの機能や官職と結びついている、とも述べている<sup>22</sup>。

この点はシュンペーターの社会発展概念の具体的内容を理解するのに役立つ。シュンペーターは資本主義崩壊の理由の一つとして、進歩の自動機械化を挙げていた。それは、「技術進歩はだんだんと、必要なものを生産し予測しうる方法でそれを作用させるような訓練された専門家集団の仕事になりつつある」ことと、「経済変化に慣れるようになって——新消費財、新生産財の中断ない流れがこれを最もよく例証する——抵抗する代わりに当然のこととしてこれを受け入れるような環境においては、人格や意志力がそれほど重要でなくならざるをえない」ということである<sup>23</sup>。この指摘は、新結合の遂行という企業家の機能自体は存続しつつ、それがリーダーシップという適性と切り離されるということを意味している（というのは、上の二つの点が、前述した、新結合に必要な指導者としての能力と対応しているからである）。シュンペーターはこの過程を、封建時代の軍事貴族のたどった過程と同じものだと説明している。中世の戦争は個人的な腕前と武勇によるものであり、「この仕事が言葉の最も十分に最も豊かな意味における一つの社会階級の基礎となった」。しかし社会的・技術的变化によって戦争が機械化されたため、「今では単なる専門職にすぎないものの中で成功しても、もはや、その人のみならずその集団をも持続的な社会的リーダーシップの地位に上昇させるような個人的業績という意味をもたらさなくなってしまう」<sup>24</sup>。

以上の説明は、リーダーシップが具体的に、中世には軍事貴族の戦争機能と、近代には企業家の企業家機能と、それぞれ結びつくことを示している。そして企業家機能がリーダーシップとの結びつきを失うことが近代資本主義時代の崩壊を導くのであるが、これも中世における戦争機能と同じだとすれば、次のように定義しうるのではなかろうか。すなわち、中世とはリーダーシップが戦争機能と結びつく時代であり、近代とはリーダーシップが企業家機能と結びつく時代なのだ、ということである。そして、それぞれの機能がリーダーシップとの結びつきを失うことによって、それぞれの時代が崩壊するのである。

このように考えるならば、シュンペーターの企業家は、封建時代と資本主義時代という大局的な時代理解に要請された概念であり、しかも彼がその初期から持っていた国民的指導者像の、資本主義時代におけるあらわれとしてイメージされていたことになる。彼の企業家観は、眼前の具体的な企業家を抽象化して得られたものというより、彼の歴史理解の道具として概念形成されたものだと考えるべきである。

最後に、冒頭の民主主義論に戻ろう。彼は政治を、責任感を持った伝統的な指導者階級による、国家の観点に基づく指導として理解していた。これに対し、『資本主義・社会主義・民主主義』を書いたシュンペーターの目に映ったアメリカの民主主義は、投票獲得能力に優れた者を選出するシステムであった。これは、伝統的な方法と比べて、全体性の観点から指導する適性を持つ人物を確保できるかが疑わしい。彼が民主主義成功の条件として、イギリスのように責任感を持った政治階層が予め存在していることを挙げたのは知られているが<sup>25</sup>、これは彼がアメリカ民主主義を十分に信頼していなかった証拠でもある。こう

したアメリカ民主主義の能力への不信は、シュンペーターがアメリカ移住後もハプスブルク帝国への帰属意識を持ち続けたことや、ルーズベルト批判を繰り返していたことと、当然関連しているだろう。すなわち、シュンペーターには民主主義を全体主義化から守ろうという意図はなく、むしろハプスブルク帝国の伝統的な政治手法という観点から民主主義を批判的に観察していたのである。

---

※本報告は、拙稿「シュンペーターの科学と政治学」(『国家学会雑誌』第115巻5・6号、2002年、190-258頁)、同「John Medearis, *Joseph Schumpeter's Two Theories of Democracy*」(『国家学会雑誌』第115巻11・12号、2002年、199-203頁)に多くを依拠している。

※以下、邦訳のあるものは邦訳のみを示す。ただし訳文は一部改変してある。

1 シュンペーター『資本主義・社会主義・民主主義』中山伊知郎／東畑精一訳、東洋経済新報社、1962年。

2 ペイトマン『参加と民主主義理論』寄本勝美訳、早稲田大学出版部、1977年、第一章。

3 シュンペーター「人種的に同質である環境内の社会諸階級」(『帝国主義と社会階級』都留重人訳、岩波書店、1956年)。

4 シュンペーター『経済発展の理論』塩野谷祐一／中山伊知郎／東畑精一訳、岩波文庫、1977年、216頁。

5 『資本主義・社会主義・民主主義』20頁。

6 「人種的に同質である環境内の社会諸階級」190-191頁。

7 『経済発展の理論』218頁。

8 シュンペーター「歴史と理論—シュモラーと今日の諸課題」(『社会科学の過去と未来』玉野井芳郎監修、ダイヤモンド社、1972年)。

9 同、437頁。

10 『資本主義・社会主義・民主主義』33頁、468-469頁。

11 「歴史と理論—シュモラーと今日の諸課題」435-436頁。

12 「人種的に同質である環境内の社会諸階級」256-257頁。

13 『経済発展の理論』163頁。

14 『資本主義・社会主義・民主主義』475-477頁。

15 シュンペーター「ボエーム・バヴェルク」(『十大経済学者』中山伊知郎／東畑精一監修、日本評論新社、1952年)、205-206頁。

16 J. A. Schumpeter, "Memorandum I", *Aufsätze zur Wirtschaftspolitik*, ed. by W. Stolper and C. Seidl, Tübingen, J. C. B. Mohr(Paul Siebeck), 1985.

17 『租税国家の危機』木村健康／小谷義次訳、岩波文庫、1983年。

18 中立的国家官僚については、ジョンストン『ウィーン精神』井上修一／岩切正介／林部圭一訳、みすず書房、1986年、など。

19 『経済発展の理論』230頁。

20 同、229頁。

21 「人種的に同質である環境内の社会諸階級」246頁、250頁。

22 同、257頁。

23 『資本主義・社会主義・民主主義』239-240頁。

24 同、241頁。

25 同、545-547頁。